

西尾市史だより



吉良町木田文書 82.7×117.5cm (表面)
 池(鯉ヶ淵)をめぐる争論の裁許絵図 (吉良町木田文書 82.7×117.5cm) (表面)

写真の絵図は、寛文十一(一六七二)年の鯉池(鯉ヶ淵)をめぐる争論の裁許絵図の写しです。今年度、吉良町木田に鎮座する神明社の本殿取り壊しに伴い発見されました。

表面は鯉池を中心に周辺の様子がよく描かれています。池の傍らに見える「吉良上野助殿御屋敷」は吉良家岡山陣屋に相当すると考えられます。裏面には裁決文が記されています。それによると、この争論は瀬戸村・岡山村が池の端を埋め立て、田畑を開発したことにより起こりました。三河代官の鳥山牛之助が見分し、開発した田畑は切り捨て、鯉池はそれまで通り岡山村が支配すること、池の水は瀬戸・木田・岡山の三か村が田地用水に取水でき、池の魚は岡山村だけが捕つてよいという取り決めがなされました。

これと同じものが岡山地区に伝来し、市の文化財に指定されています。しかし、裏書きがなく、絵図の性格が不明でした。今回の木田村



(裏面)

の絵図発見により、それが明らかとなったのです。また今年度の調査で、華蔵寺にも同じものが保管されていることも分かっています。

近世部会調査員

荒木 亮子

『新編西尾市史』の
編さん事業にむけて西尾市史 編さん委員長
西尾市長榊原 康正
さかきばら やすまさ

西尾市は現在、「自然と文化と人々がとけあい心豊かに暮らせるまち 西尾」を将来の都市像として掲げ、活力とやすらぎのある町づくりを進めています。そのためには、その基礎となる郷土の歴史や文化を学び、ふるさとに対する愛情を育んでいくことが欠かせません。

前回の『西尾市史』編さん事業が終了してから、約三十

年が経過しました。その間、多くの新たな歴史資料の発見があり、各分野の研究の進展によって新しい知見が蓄積されてきました。また、平成二十三年度には、旧一色町・吉良町・幡豆町と合併し、新西尾市が誕生しましたが、これによって、それぞれの地域で培われた伝統や文化、海・山・川に恵まれた豊かな自然、肥沃な平野を生かした産業や観光など、さらに魅力ある町となりました。この新しい西尾の全体像を、歴史資料からもう一度分析し、市民の皆さんにわかりやすく伝えてゆく必要があります。このような背景のもとに、『新編西尾市史』の編さん事業を開始いたしました。

現在の計画では、今後、平成四十年年度までの十五年間に、本編五巻、資料編七巻、別巻四巻の計十六巻を刊行することになっております。

この大事業を成し遂げるために、各分野の優秀な専門委員にお集まりいただきましたことに、心より感謝申し上げます。また、この機に、これまで埋もれてきた資料や文化財についても調査や収集を進め、未来へと伝えてゆく努力をしなければなりません。そのためには、市民の皆さまのご協力が不可欠です。

市民に愛され、活用される、充実した『新編西尾市史』を作り上げるために、皆さまのお力添えをいただきますようにお願い申し上げます。

新編西尾市史

編さん計画の概要

① 基本方針

(1) 学問的水準の反映

近年の学問的水準が反映されるよう、学界の研究成果を広く取り入れる。

(2) 広汎な資料調査

市民の理解と協力のもとに、市内外にわたって広範囲な歴史資料調査を行う。また、旧幡豆郡3町の埋蔵文化財分布調査、社寺の美術工芸品・建築の調査を行う。

(3) 資料編の充実

時代の変遷や歴史的評価の変化に左右されない「資料編」に重点を置く。先の『西尾市史』で未掲載であった資料、新しく収集した資料をできるかぎり掲載する。

(4) 平易な表現

市民に親しまれるように、できるだけ平易な文章で記述し、斬新なレイアウトで写真や図表などを多く用いる。

(5) 資料の電子化

収集した資料は、情報をデジタル化し、データベースを構築する。

(6) 収集資料の整理・保存・活用

収集した資料は、将来の市民



『新編西尾市史』の
編さん開始について

西尾市史 編集委員長
古代・中世部会 編集委員

金田 章裕



新たに『新編西尾市史』を編さん・刊行する計画がスタートしました。四旧市町が合併して新市域が成立した機会に、改めて新しい市域を基礎とした市史の編さんを目指すものです。編さん計画では、広く市民に親しまれること、また情報を広く収集して公開することを意図しています。

「市史」は市域を単位とし

た地域史ともいえます。一般に地域といえば、その広がりには大小いろいろですが、いずれも現在の市民が生活を営む場です。住民はもちろん何等かの目的でやってくる人々を含め、そこで様々な活動をする人々の舞台でもあります。

地域の実情や由来を知ること
は、自らの歴史を確認するこ
とにほかならず、自分自身を
知ることにもなります。例え
ば地域の地形条件や環境変化
を知るとは、防災を含めた
日常の行政や日常生活に直接
かわります。多くの場合、
地域を知ることによって地域
への愛着も生まれます。新し
い市域を知るとは市民にとっ
てとりわけ意義の大きい
ことでしょう。

地域が、日本の歴史や日本全体の中で、立地条件から見て、また文化的、経済的にどのような位置を占めていたのか、というのは自らを知るた

めにも大きなきっかけになるでしょう。地域史を編む意義は、これらの様々な事柄に地域の目で迫ることにあります。地域の目とは、地元に残る生活・活動の歴史に視点を据えることですし、それを語る地元の資料を重視することです。

地域史の史料はさまざまに残る古墳はもとより、地下に発見された考古遺跡、遺物は、具体的な遺構や実物を通して過去の様々な事実の断片を伝えてくれます。とはいえ、文字で記された歴史資料が地域史を編むうえでも基本的な資料であることは言うまでもありません。歴史資料にはその地域以外のところでは伝えられて来たものや、さらには編纂された文献もありますが、地域の目にとつて何より重要なのは、その地域に伝わった史料です。古くからの

利用に供することを意図して、整理、保存を進める。

② 編さん刊行計画

(1) 名称

『編西尾市史』とする。

(2)事業期間

平成二十五年度から四十年
度までの十六年間で予定す
る。

(3) 市史の編成

本編五卷、資料編七卷、別卷四卷の計十六卷とする。

③ 編さん体制

(1)西尾市史編さん委員会

市史編さんに関する企画及び市史の編集援助及び出版に関する事項を審議し、決定する。市長を委員長とし、十五名以内の委員からなる。

(2)編集委員会

執筆及び編集など、編さんの専門的事項を審議し、決定する。

(3) 部会

委員会の構成は、考古、古代・中世、近世、近・現代、自然、美術工芸・建造物、民俗、学芸・文化の各部会長からなる。

編さんの専門的事項を時代ま
たは分野別に、調査、研究、執
筆などを行う。部会の構成は、
編集委員（部会長）、執筆員、
調査員からなる。

寺院や神社、あるいは町・区などの地域の組織はもちろん、多くの家に伝えられた日記やメモのような記録にも、しばしば貴重なものが含まれています。

文字に書かれた資料だけではなく、神社や寺院の建築物は、文化や技術の担い手や交流のものがたり、例えば襖に描かれた絵画や、神社に奉納された絵馬であつてもしばしば貴重な資料となります。カメラ技術が入った明治後のことになりますが、古い写真が見つかれば、これもまた貴重です。

これらの地域に伝わる資料には古地図も含まれます。ここで古地図と称しているのは、しばしば絵図とも呼ばれている、明治以前の地図類です。身近な町や村を描いたものがあれば、その時期の実状あるいはその時期の人々が描かれた対象をどう見ていたのか

かといった状況を知ることができる貴重な資料です。

古地図の一種である地籍図は、明治の初めから中ごろに一定の基準で作られました。作られた時点での、土地区画、地目（土地利用）が表現されているとともに、小字地名が記入されています。小字地名はその土地の様々な由来を反映する貴重な土地の記録です。

地元伝えられているものの中には、時に文字で表現されたことが以上に雄弁なものがあります。口頭で伝えられてきた様々な伝承や行事、習慣などです。かつて使用されたり、作られたりしてきた道具類などもそうです。これらの多様な事柄を、民俗あるいは民具と称していますが、いずれも地域史を編むためには欠くことのできない資料です。

こういった様々な特性から

なる資料の収集には、執筆を担当する研究者はもちろん、編さん業務にかかわる市の職員の努力が必要です。しかしそれだけでは不十分であり、地元の多くの方々のご協力が必要なければ十分な収集は困難です。改めて、市民各位のご理解とご協力をお願いしなければなりません。

『新編西尾市史』は、本編五巻、資料編七巻、別巻四巻からなる予定です。これから地元資料の収集やそれに基づく執筆によって変更はありますが、いずれにしても地域史の視点に立ちながら、近年の学問水準に拠って、平易な記述として、市民に親しまれる刊行物としたいとおもっています。

これからの長い編さん過程への、市民、市当局双方の深いご理解と、ご協力をかさねてお願いいたします。

部会および編集委員

(敬称略)

部 会	編集委員(部会長)	所 属
考古部会	加藤 安信	大同大学大同高等学校校長
古代・中世部会	金田 章裕 田島 公邦 山田 邦明	京都大学名誉教授 東京大学史料編纂所教授 愛知大学教授
近世部会	池内 敏智 神谷 浩	名古屋大学教授 愛知大学教授
近・現代部会	岡田 洋司 宇佐見正史	元富山国際大学教授 岐阜経済大学教授
自然部会	増田 元保	碧南海浜水族館館長
美術工芸・建造物部会	神谷 浩	名古屋市博物館副館長
民俗部会	野本 欽也	岡崎むかし館主任専門員
学芸・文化部会	塩村 耕	名古屋大学教授

■ 年次刊行計画

※今後変更される可能性があります

刊行年度	本 編	資料編	別 巻
30		考古編	
31		古代・中世編	
32		近世編 1 (領主)	
33	原始・古代・中世編	近世編 2 (農村 1)	
34	近世編 1 (領主)		美術工芸・建造物編
35		近世編 3 (農村 2)	自然編
36	近世編 2 (農村)	近代編 1	
37			民俗編
38	近代編 1	近代 2・現代編	
39	近代 2・現代編		
40			年表・索引

こちら 考古部会です。

考古部会 編集委員

加藤 安信

考古部会は、『新修西尾市史資料編』においては旧石器時代から江戸時代までの遺跡や発掘調査で発見された遺構・遺物などの考古資料を扱い、本編ではおそらく古墳時代までのいわゆる「原始」時代を担当することになる部会です。資料編には部会があるのに本編には部会がない、この捻じれのような齟齬は、歴史資料の解析方法の違いと世界的な時代区分から生じているものです。

考古部会が対象とする資料の多くは、発掘調査という考古学の方法によって得られます。このため、八ッ面山北部山麓にある奈良・平安時代の遺跡や西尾小学校周辺で発見された中世の西条城の堀跡、江戸初期の幡豆の矢穴石、西尾城跡出土の近世の遺構や陶磁器類などについても、市史資料と

して考古部会がまとめていくことになります。こうした考古資料が明らかにする昔の人たちの生活の様子は、文献史資料を中心に綴られていく古代以降の西尾の歴史に深みを与えることになると考えます。『新修西尾市史 資料編 考古』は、次のような観点で編集を行っています。

第一は、杉浦敦太郎先生が中心となつて作成された昭和四十八年刊行の『西尾市史一 自然環境・原始古代』の視点を大切にするということです。当時は地方自治体史を編さんする場合に、本文編と資料編とを分けて作成するという考え方が全国的に希薄でしたから、この本には土器の拓本などのたくさん資料が本文と一緒に掲載されています。しかし、逆にそのことにより、大昔の人たちの息遣いや遺跡の調査・資料の発見に携わった人たちの思いが伝わってくるような感じがしています。

第二は、平成二十三年の市町村合併で市域が広くなり、平野と丘陵、矢作川と三河湾、そして島がある自然豊かな市となりましたの

で、多様な風土に生きた大昔の人たちの暮らしと文化の流れが想像できるような記述に心がけたいということです。伊勢の海から三河湾、そして矢作川が情報伝達の大きな柱の一つとなっていたであろうことを遺跡や考古資料から紡ぎ出していく必要があります。

第三は、全編カラー印刷の効果をも最大限に発揮した市史を作るということです。特に考古資料の場合、モノクロとカラーとでは伝えることのできる情報の深さが違います。すでに旧幡豆町は苦しい財政状況の中で『幡豆町史 本文編』をカラー印刷にされましたし、『安城市史』『新修豊田市史』も全編カラー印刷で刊行されています。親しみが湧き、見ても楽しい市史にすることが課題となるでしょう。

日本では昭和四十年代後半以降、土地開発に伴う遺跡調査が急増したため、全国の地方自治体は考古学を学んだ人たちを教育委員会や博物館などの職員として採用してきました。県や市町村の文化財保護体制の自立を図るべくこの

ような動向を応援してきた立場からして、地方自治体史の特に資料編を作成する場合には、こうした専門的知識と技術を持つ職員に、自らが調査した遺跡の記述を少しでも担当していただくことが大切ではないかと考えてきました。考古部会には何人かの市職員の方が執筆メンバーとして加わっています。地域史をまとめていくためには、何よりも現場主義の考え方が重要ですから、心強い限りです。

「資料編 考古」が市民の方々の史跡や遺跡に対する一層の理解に繋がれば、大変に嬉しく思います。



長圓寺発掘現場での調査のようす

資料紹介 明治政府の西尾領内巡見

新編西尾市史の編さんにあたって、歴史資料の見直しや収集を進めています。そんな中、熊味町の個人宅から、古いふすまの下張りをいただきました。

下張りの文書は断片的であるため、史料の内容がとらえにくいものですが、それでも一枚ずつ剥がしながら整理していくと、西尾藩に関わる新しい史料が発見できました。ここでは、その一点を紹介します。

文書は二枚からなっていますが、内容を読み解くなかで繋がるのが分かりました。その内容は、民部省の役人が地方視察のために蒸気船で平坂湊に着き、平坂村で一泊する際の取扱いを尋ねられたことへの対応を



書き上げたものです。西尾藩の回答は次のようです。

- 一、宿は平坂村の古居八次郎方へ申し付ける。役人は総勢十二、三人であるが、同家は大きな屋敷であり、何の差し支えもないと思われる。
- 一、食事は、上の者が一汁三菜、下の者が一汁二菜に申し付けるべきであろうか。
- 一、上分の者には菓子差し出すべきであろうか。
- 一、旅宿の門前へ盛砂・飾手桶を差し出すようにすべきであろうか。
- 一、夜分の火之元見廻りを油断のないように申し付けるべきこと。
- 一、諸用のため、西尾藩正権少属の内一人が罷り出て、旅宿へ控えているべきであろう。また、史生出仕の内一人、使部二人を罷り出るようにすべきこと。
- 一、御支配地通行の節、箒持ちが一人先に立つ。村役人が案内し、捕亡一人が先払いして往來の者を控えさせるように申し付けるべきこと。



断片的な文書が貼り合わされたふすまの下張り

- 一、用物などの継ぎ立てを差し支えることのないように村方へ申し付け、人足其の不法法もないように申し付けるべきこと。
- 一、菊間出張所大浜村へ越されるならば、河原洲鼻（中畑村烏ヶ鼻）通りが順路であるので、右へ案内させる。且つ右渡船場へ出仕の内一人を出され、渡船が差し支えないように致すこと。尤も通行の道筋を掃除致させるよう申し付けるべきこと。

年月日は不明ですが、西尾藩の官職名や民部省の名称などから明治三年九月～四年七月頃と思われる。この当時、明治政府によって藩制の改革が要請され、西尾藩では陸海軍資の増額



一枚ずつ剥がして整理します

と藩債の支償を目途とし、諸費節減を計っています。この史料によって、政府民部省の役人十二、三人の一行が西尾藩領内を視察に訪れ、巡見したことが分かります。

市史編さん事業の重要な活動の一つに新史料の発掘があります。そのため、もし皆様のところに眠っている史料があれば、ご連絡下さい。一枚の史料によって新たな歴史を付け加えることができるかもしれません。所蔵者のご協力を得ながら、地域の歴史を解明していきたいと考えています。

主な活動記録

(平成26年4月～27年1月現在)

● 編さん委員会
26年4月25日

● 編集委員会
26年6月25日

● 考古部会

● 部会

26年4月27日・5月13日・7月19日・11月2日

● 調査

26年6月6日 鳥羽神宮寺採集瓦

6月15日 八王子貝塚出土石器

8月24日

9月13日

10月11日

11月3日

12月3日

長根古墳・宮前古墳・和尚塚古墳・蔵迫古墳・西風入古墳

長圓寺(貝吹町)発掘現場

大名旗本墓地予備調査

● 打ち合わせ等

26年10月9日

27年1月7日

南山大学

京都府立大学

● 古代・中世部会

● 部会

26年8月2日(中世)・11月7日(古代・中世)

世)・12月6日(中世)

● 調査

26年8月2日 吉良氏関係(平姓吉良氏)文書

12月6日 吉良氏関係(鎌倉期)文書

小笠原氏文書

● 近世部会

● 部会

26年5月11日・7月5日・12月13日

● 調査

26年8月29日 華蔵寺(吉良町)文書

(愛知県史と合同)

9月6日 花岳寺(吉良町)文書

(愛知県史と合同)

10月5日

11月7日 愛知県史編さん室所蔵データ

● 近代・現代部会

● 部会

26年9月7日

● 調査

27年1～3月

「新愛知」新聞

● 自然部会

● 部会

26年7月16日・1月14日

● 美術工芸・建造物部会

● 部会

26年5月25日・1月24日

26年7月27日 西福寺(吉良町)ほか建造物

9月5日 観音寺(二色町)・満国寺

(同)絵画

9月6日 花岳寺(吉良町)建造物

● 民俗部会

● 部会

26年9月15日・12月6日

● 調査

26年7月18日 西尾祇園祭町ぞろい

8月3日 鍵万燈

9月21日 鳥羽・八幡・小野ヶ谷現地踏査

9月28日 西幡豆・寺部現地踏査

12月6日 市保管民具

12月7日 鳥羽の火祭り

● 寺院予備調査

26年6月19日 満国寺(一色町)・光粒寺

(同)・普門寺(同)

6月26日 宝珠院(吉良町)・観音寺

(同)・大島教会(同)ほか

9月18日 崇用寺(二色町)・源北寺(同)

ほか

11月26日 長久院(二色町)



満国寺での調査の様子

調査にご協力をいただいた皆さま、
情報をお寄せいただいた方々へ
心より感謝を申し上げます。



刊行物のご案内

好評販売中

『吉良家日記』

B5判 箱入上製本 本文八八〇頁 口絵二頁 五〇〇〇円

幕府の儀式典礼を掌り、朝廷・寺社等での公式行事において將軍の名代を務めた高家職の任にあった吉良家の当主（義弥・義冬・義央）が、職務遂行のための覚として書き残した記録です。宮内庁書陵部蔵の『吉良家日記』全二七冊を翻刻し、解題及び特論二編を収録しています。翻刻本文は全頁に脚注を付し、巻末には年月日と索引を付載しました。

販売所 西尾市岩瀬文庫（亀沢町）・尾崎士郎記念館（吉良町荻原）

*郵送でも販売しています。下記担当までお尋ねください。

刊行予定

『新編西尾市史研究』第一号

A4判 平成二十七年春刊行予定 ただいま編集集中！

市史編さん事業の過程の調査・研究の成果をいち早くご紹介します。

（内容）「延暦十八年の崑崙人（天竺人）の参河国漂着と綿種の伝来」「永禄年間の三河国争乱と幡豆小笠原氏」「京都所司代板倉勝重の出自と登用」「板倉重矩編『自心受用集』の翻刻と解題」「西尾城に関する絵図資料について」「小島城について」ほか（予定）

資料や情報を

お待ちしています。

- ・古文書や古い日記、手紙など
- ・神社、寺院、町内会、団体などで引き継いでいる書類
- ・戦前の市内で発行された雑誌や広告、ポスター
- ・昔の暮らしや年中行事に関するもの
- ・昭和四十年代以前の西尾の風景や行事を写した写真、絵はがき
- ・古い絵画、彫刻、工芸品
- ・地震や高潮など、災害に関する資料や写真
- ・そのほか、西尾にゆかりの深い資料

担当・お問い合わせ

西尾市教育委員会文化振興課 市史編さん担当

〒四四五―〇八四七 西尾市亀沢町四八〇

西尾市岩瀬文庫内

TEL 〇五六三―五六―二四五九

FAX 〇五六三―五六―二七八七

E-mail iwasebunko@city.nishio.lg.jp

このようなものがありましたらお知らせください。調査を行い、今後の市史編さん活動に役立てます。



三河地震 西尾町丁田の被害（萩原律氏撮影）

